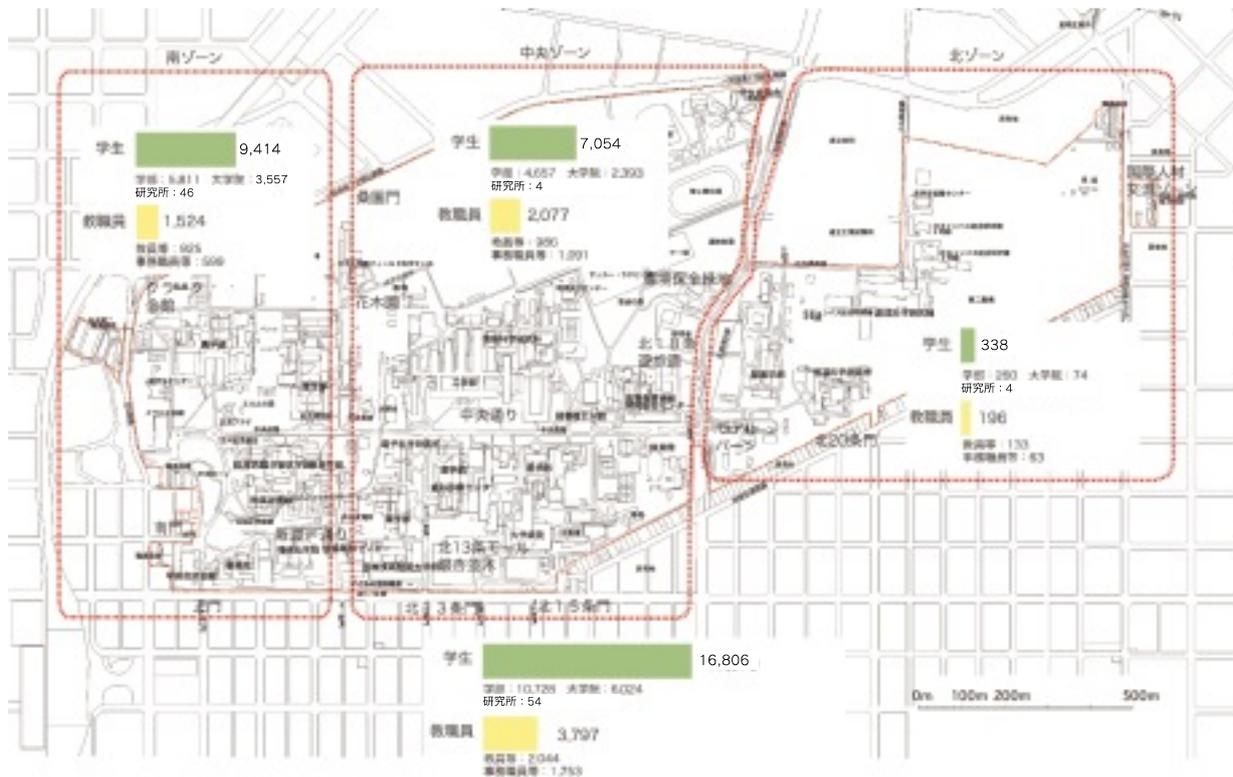


3. 札幌キャンパスの概要

施設・環境マネジメントのベースとなる南、中央、北の各アカデミックゾーンの概要と計画の方向性を整理する。

3-1 学生・教職員の分布

大学全体では、学生：16,806人(内留学生764人)、教職員：3,797人(平成18年5月現在)の人口があり、各ゾーン毎の人口(比率)は、南ゾーン：10,938人(53%)、中央ゾーン：9,131人(44%)、北ゾーン：534人(3%)である。南、中央に比較して、北ゾーンは、極端に人口が少ない。

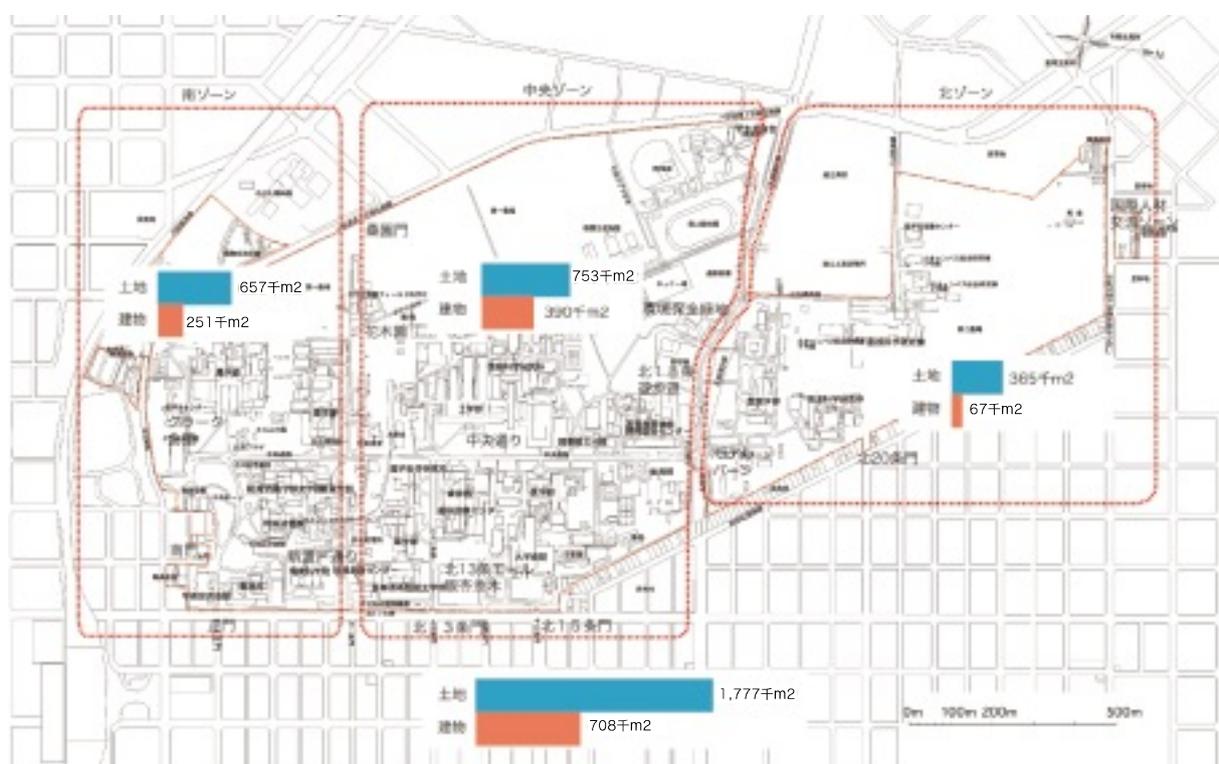


ゾーン別キャンパス人口

3-2 土地、建物

(1) 土地、建物面積

大学全体の土地面積は1,777千 m^2 、総建物床面積は708千 m^2 である。ゾーン別容積率(床/土地)は、南:38%、中央:52%、北:18%となる。キャンパスの発展過程で、本学の創設期に形成された南ゾーンでは、低密なキャンパス空間であり、大学の発展・成長期に形成された中央ゾーンは、一番高密である。21世紀の展開期として位置づけられた北ゾーンは、農場と研究施設が共存しており、他のゾーンと比較し、容積率は小さい。

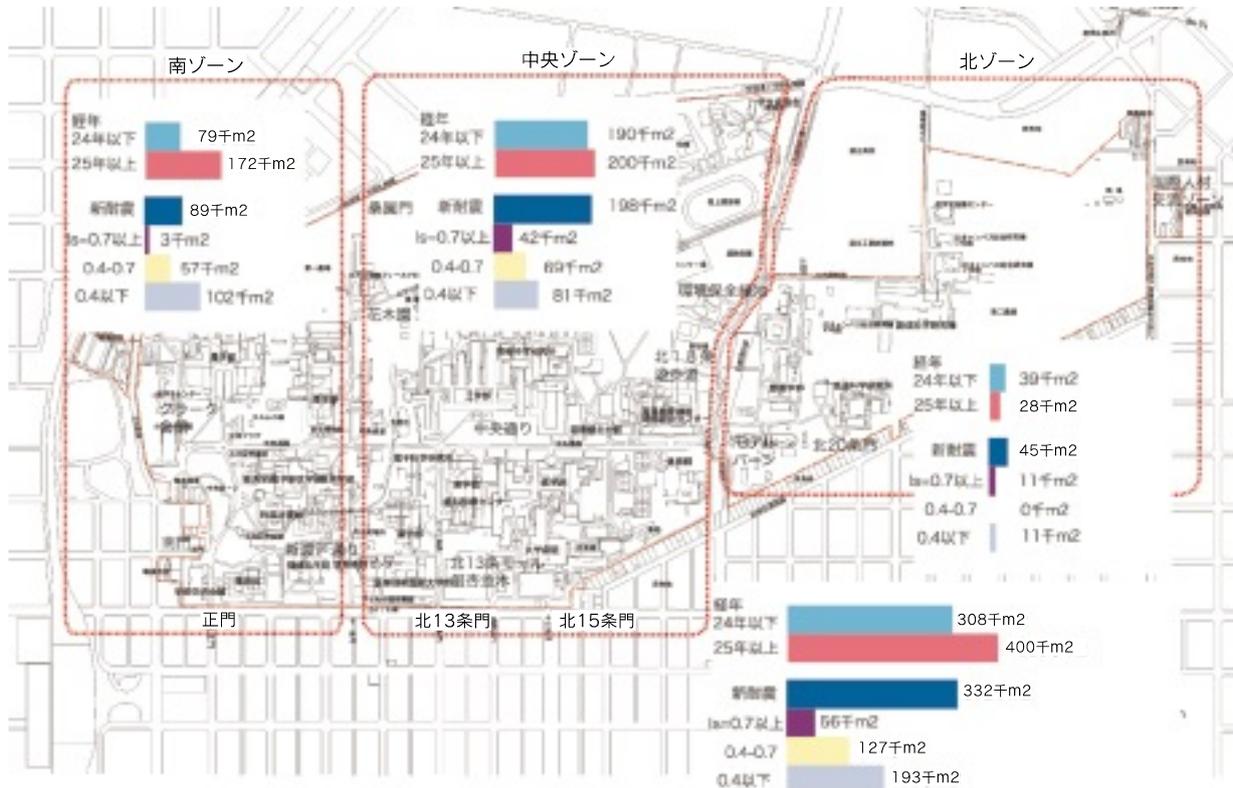


ゾーン別土地・建物面積現況

(2) 経年別建物分布

札幌キャンパス全体では、築25年以上になる建物が400千 m^2 (全体の57%)で、特に築35~39年の建物面積が多い。

ゾーン別では、南ゾーンが172千 m^2 (69%)、中央ゾーンが200千 m^2 (51%)となっており半分以上が築25年以上である。北ゾーンは、28千 m^2 (42%)と少ない。



施設の経年と耐震指標

(3) 建物の耐震性能

耐震改修・補強の緊急度の高い Is 値 0.4 以下の建物は 27% (193 千 m²) で、0.4~0.7 までの建物を入れると 53% (376 千 m²) となり、キャンパスの約半数の建物が耐震的な対応を必要としている。

Is 値 0.4 以下の建物は、南ゾーン 102 千 m² (53%)、中央ゾーン 81 千 m² (42%)、北ゾーン 11 千 m² (5%) であり、南、中央ゾーンに耐震的な対応が求められている建物が多い。(平成 18 年 5 月現在)

3-3 計画課題

以上のように、南、中央、北の 3 つのゾーンは、建物分布、人口、建物の経年の度合い、容積率などがそれぞれ違い、札幌キャンパスは一様ではない。それを勘案して各ゾーンの計画の課題を挙げると以下のようなになる。

南ゾーン：

- ① 理学研究院のように一部高層の建物があるが、中央ローン、エルムの森といったオープンスペースが保全され、本学の特徴あるランドスケープを施設と外部空間の密度的バランスによって形成している。このゆとりあるランドスケープと美しい景観を守りながら、施設整備を進めていく。
- ② 文系4部局や農学研究院、理学研究院などが立地し学生数が一番多いゾーンである。教員、学生、来訪者などの交流を促進する空間や施設の整備を検討する。
- ③ 建築年の古い建物が多く、耐震的な対応が必要である。
- ④ しかも上記の施設がキャンパスの重要な景観要素でもある。それらを持続的に利活用していくための方策を検討する。

中央ゾーン：

- ① 施設の密度分布が一番高いエリアであり、密度の基準設定を考慮した建物配置の方向性を検討する。
- ② 大規模な部局が存在し、キャンパスの中心部でもあることから、大学のライフスタイルを支える豊かなパブリックスペースの充実を検討する。
- ③ 南キャンパスに次いで、耐震改修が必要な施設が多く、逐次耐震的対応をしていくための具体的実施計画を検討する。

北ゾーン：

- ① 今後の土地利用にあっては、土地利用密度の設定やランドスケープの創出目標を、南ゾーンや中央ゾーンが持つ空間的特徴を考慮しながら検討する。
- ② キャンパスとしての環境整備が必要で、特に南、中央の両ゾーンに見られるような、自然環境との調和を図りつつ、施設機能の立地を誘導し、今後の産学官の連携によるサイエンスパーク、リサーチパークとしてのアメニティ環境を検討する。